

# フィンランド：「学びをめぐる変化は PISA の結果に影響を与えるのか」

## 1. フィンランドにおける PISA の受容

### (1) フィンランドと PISA

- フィンランド=PISA の優等生
  - ⇒ 成績が良い：高い到達度、ボトムアップ型の分布、格差の小ささ
  - ⇒ PISA の結果を政策的に反映：子どもの福利、学習意欲向上策、男子生徒の読解力向上

### (2) フィンランドにおける PISA の影響とその受容

- 内的要因：内発的改善ニーズ ⇒ 教育政策立案・教育改革における活用  
教育制度（システム）のチェック
- 外的要因：予期せざる影響 ⇒ 国際的注目の高まり  
義務教育制度批判・学力低下論の鎮静化

表 1：フィンランドにおける学力関連政策および PISA 関連年表

年	内 容
1989	理数科審議会（レイコラ委員会）：理数科教育改革の必要性及びそのための専門家会議の設置を答申
1991	大学入学資格試験委員会報告：大学入学資格試験における数学の成績を問題視 IEA の PIRLS（読解力調査）において、第 4 学年と第 9 学年でトップ。
1992	教育省理数科教育 WG：理数科教育の指針策定
1995	リッポネン内閣：数学・自然科学に関する知識向上プログラム策定
1996	教育省：LUMA（ルマ：理数科教育推進）プログラム 大学入学資格試験委員会報告：大学入学資格試験における母語の成績低下を指摘
1997	「読解力」年
1998	体系的な全国学力調査の開始（原則：母語と数学、第 9 学年、サンプル調査、2 年に 1 度） OECD 国際成人リテラシー調査において 16-25 歳層がトップ
2001	国家教育委員会：LUKU-Suomi（ルク・スオミ：読解力向上）プログラム（～2004） PISA2000 結果公表
2003	ヘルシンキ大学理学部に共同利用施設として LUMA センターを設置：理数科教育推進
2004	新教育課程基準公布 国家教育委員会：外国からの視察及び外国メディアの対応窓口を設置 PISA2003 結果公表（12 月）
2005	国家教育委員会：国際セミナー「PISA 調査におけるフィンランド」（3 月、10 月、12 月） 大学入学資格試験改革（～2006）：弾力化
2006	新教育課程基準の施行
2007	国家教育委員会：日本人教育専門家対象セミナー「教育制度の特徴」開催（2 月） オウル大学に二か所目の LUMA センターを設置 PISA2006 結果公表
2009	ヘルシンキ大学パルメニア継続教育センターが、外国からの教育視察コーディネートを開始
2010	教育文化省：「教育輸出戦略」策定 2014 年改訂予定の新教育課程基準の基本方針の決定 PISA2009 結果公表

PISA における好成績 = 現状肯定

⇒ 現状の「変化」「転換」という意味での「PISA ショック」は経験していない

## 2. PISA の結果と教育制度とのかかわり

### 【教育省の説明によるフィンランドの成功の秘密】（PISA2003）

- ① 教育機会が均等であること
- ② 性別・居住地・家庭の経済状況・母語などによる格差が小さいこと
- ③ 教育の無償制が採られていること
- ④ 教育行政が協力的かつ柔軟で、現場との間に良好な関係が築かれていること
- ⑤ 固定的な能力別学級編成やランク付けが行われていないこと
- ⑥ パートナーシップの理念に基づき、協同的な学習活動が行われていること
- ⑦ 教員の力量が高く、教育内容について大きな裁量を持っていること
- ⑧ 社会構成主義的な考え方に基づく学習理念が浸透していること

#### ■ 教育制度上の特徴と PISA の結果の符合

- 「平等」を基調とする教育制度：教育機会、学習機会、学習成果の「平等」を目指す多層的アプローチ（Välimaa, 2008）
- PISA の結果：高い到達度、相対的に小さい格差、ボトムアップ型の分布（平等性と卓越性）

#### ■ 近年における学びをめぐる変化：

- 厳しい財政（教員の勤務環境の変化、教育費の算出方式の変化など）
- 教育に関する裁量における中央と地方のバランスの調整
- 大学入学資格試験の弾力化
- 移民子弟の増加
- 格差の拡大？

## 3. フィンランドの視点から見た PISA2009

#### ■ 基本的に、これまでと同様の結果

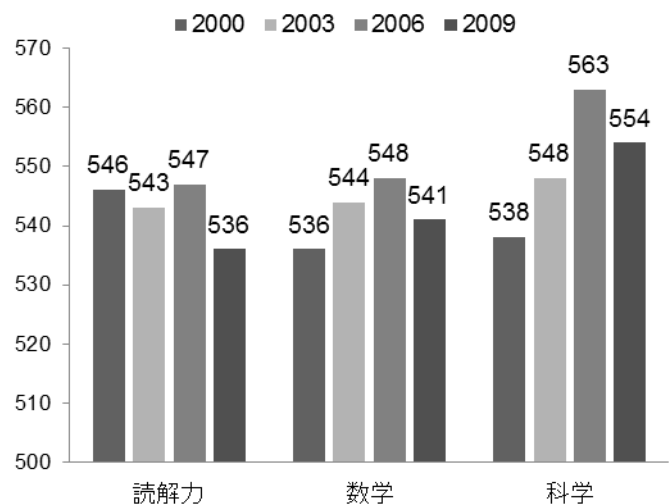
##### ■ 学習到達度（卓越性）

- 相対的に高い到達度（ボトムアップ型の分布）
- ほぼ「定位置」⇒ 得点は若干低下傾向

##### ■ 格差（平等性）

- 相対的に小さい生徒間の格差
- 相対的に読解力における家庭の社会経済的背景の影響が小さい
- 読解力における男女間格差が OECD 諸国最大（2000年に続き）
- 相対的に各リテラシーにおける生徒の社会経済文化的背景の影響が小さい

図1：フィンランドのリテラシー別得点の変遷



#### Acknowledgement:

本報告の準備の際、科学研究費補助金基盤研究（B）「国際学力競争におけるグローバル・ガバナンスの実相の比較研究－PISA を事例として－」の研究グループ、および北欧教育研究会のメンバーより、多くの示唆を与えていただきました。ここに記して御礼申し上げます。